

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第73号 2021年1月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 身近な題材から学校を考える -「学校のチャイム」を題材とした授業実践を事例に-	八田 友和	2
逸話と世評で綴る女子教育史(73) -“虎の門女学館”以後の変貌-	神辺 靖光	6
東京帝大生らの学費及び教科書・学用品代について -『東大入学案内』(1935年12月)から-	谷本 宗生	11
明治後期に興った女子の専門学校(28) 女子英学塾の創設者-津田梅子	長本 裕子	15
学校資料の教材化を模索して⑦ -運動会と組体操を事例とした授業モデルの開発-	八田 友和	20
カレッジノベルの研究への道(19) :久米正雄「受験生の手記」(10)	吉野 剛弘	25
教育史研究のための大学アーカイブズガイド(27) -コロナ禍における大学アーカイブズの現状④-	田中 智子	29
木下広次に関する先行研究(2) -身体の西洋化に着目した白石義郎の研究-	富岡 勝	32
体験的文献紹介(21) - 閑話休題Ⅱ 繁栄から没落へ 城右高等学校-	神辺 靖光	36
刊行要項(2015年6月15日現在)		40
短評・文献紹介		41
会員消息		42

コラム

身近な題材から学校を考える —「学校のチャイム」を題材とした授業実践を事例に—

はった ともかず
八田 友和

(クラーク記念国際高等学校)

1. はじめに

本稿の目的は、筆者の勤務校で行ったチャイムを事例とした授業実践について、その概要を整理・提示することである。筆者が勤務する“クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス”では、2020年12月に授業開始

や終了時に流れるチャイム（音源）の変更を行った。変更を行った理由は、隣接する専門学校と音源が同じなため、区別化を図ろうとしたためである。¹⁾「学校のチャイム」は、授業の開始や終了を告げる装置として全国的に採用されている。一方で、自主性を育てるという観点から、チャイムをあえて導入していない、もしくは、取りやめた学校もある。

そこで本稿では、学校におけるチャイムの必要性を考える授業実践を行ったため、その概要を整理する。

2. 学校のチャイムについて

ここでは、全国の学校で使用されているチャイムの歴史と概要について整理する。チャイムが導入されるまでは、時間割に合わせて授業を行う工夫として、授業の開始および終わりを鐘の音で知らせていた²⁾。しかし、学校の端から端まで行き鐘を鳴らすためには、相当な時間がかかるため、クラスによって時間差が生じてしまうなどの問題があり、チャイムを音源とした放送に変更となった。学校のチャイムでよく耳にする「キンコーンカーンコーン」のメロディは『ウェストミンスターの鐘』がもとになっており、多くの学校で採用されている。一方で、「ノーチャイム運動」を実施して、チャイムを廃止した学校も存在する。インターネットで少し検索するだけで、子ども達の時間に対する意識を高めることや、見通しを立てて自主的に行動する力を身に付けさせるためにチャイムの廃止に踏み切った学校が散見される。

そこで本稿では、チャイムを鳴らしている学校と「ノーチャイム運動」を進めているそれぞれの学校の主張を整理し、そこから情報を読み取り、その情報をもとに小論文を執筆する授業を行ったため、その概要を整理・提示する。

3. 授業実践の概要

授業実践の概要については次の通りである。

- (1) 科目名：学校設定科目：小論文（全日型コース 2年生対象）
- (2) 期間：2020年11月26日（木）
- (3) 場所：クラーク記念国際高等学校 芦屋キャンパス
- (4) 生徒数：12人
- (5) 授業の流れ・方法

まず、チャイムが変わることを改めて生徒に伝えた。では、チャイムがない時代は、どのように授業の開始や終了を知らせていたのかを考察させた。生徒からは「時計で確認した」「鐘をならした」などの発言がみられた。それを受け、当時使用されていた鐘の画像を生徒に提示した。その際、学校の隅々まで鐘で時間を伝えるためには時間がかかってしまうことなどのデメリットを伝えた。そして、その代替策としてチャイムが導入されたことを伝えた。一方で、チャイムを導入していない学校があることを伝え、タブレットで調べ学習を行わせた。そして、「学校にチャイムは必要か？そうでないか？」というテーマを設定し、小論文の執筆を行わせた。

4. 考察

本研究の成果として二点挙げられる。

第一に、学校のチャイムを事例に、批判対象となる既存の制度に別の選択肢があることを発見させることができた点である。学校にチャイムが存在することは、生徒にとって自明のことである。しかし、そこに疑問を投げかけることで、生徒たちがもつ既有知識にゆさぶりをかけることができた。その際、他地域の学校の事例を併せて取り上げることで、別

の選択肢（ノーチャイム）があることを発見させ、相対化を図るきっかけづくりを行うことができた。

一方で課題として、批判対象となる他の選択肢にどのようなものが存在するか（存在しえたか）考え、それら複数の選択肢の中からどれが理想的なのかを追究する過程を組み込むことが挙げられる。今後の課題としたい。

5. おわりに

本稿では、チャイムを用いた授業実践の紹介を行った。生徒にとって身近な話題を取り上げ、それを批判的に考察することによって、批判的思考力を高めることにつながると考えている。今後も、批判的思考力を高める授業実践を心がけていきたい。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、クラーク記念国際高等学校の石川眞椰氏にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

【註】

- 1) 筆者の勤務校には、同じ創志学園グループの関西健康科学専門学校が隣接しており、同じチャイムの音源を使用していた。そのため、授業の開始や終了時がわかりにくいという問題があったため音源の変更を行った。
- 2) 『企画展 むかしのがっこう』p11を参照。

【参考文献】

- ・村野正景・和崎光太郎（編）2019『みんなで活かせる！学校資料－学校資料活用ハンドブック－』学校資料研究会
- ・島田雄介・神野晋作・八田友和2018「学校所在資料の活用～学校現場に聴く～」『考古学研究』第64巻3号, pp.10-19

- ・渡部 竜也 2015 「社会問題提起力育成のための授業構成の理論と方法(1)」 『東京学芸大学紀要』 第66号、pp.19-37
- ・練馬区立石神井公園ふるさと文化館(編) 2018 『企画展 むかしのがっこう』 練馬区立石神井公園ふるさと文化館
- ・文部科学省 2019 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説-地理歴史編-』 東洋館出版社

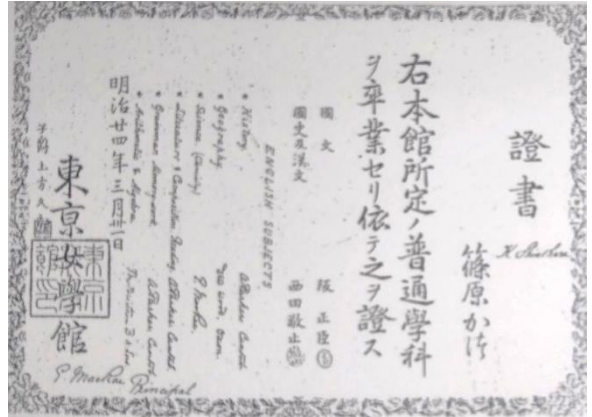
***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。**

逸話と世評で綴る女子教育史(73)

—“虎の門女学館”以後の変貌—

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

明治23年9月、東京女学館は麴町区三年町虎の門(現千代田区霞ヶ関三丁目・文科省に隣接する国立教育会館あたり)にあった工部大学校跡地に移転した。ここは元日向ひゅうがのべおかはん延岡藩邸であったが、明治10年、工部省がここに工部大学校をたてた。しかるに明治19年、工部大学校が帝国大学の工科大学になって小石川区に移ったので東京女学館が旧工部大学校の生徒館に移転したのである。以後、東京女学館は“虎の門女学校”と愛称された。



第1回卒業証書

虎ノ門に移った翌年の明治24年7月、女学館は第一回の卒業証書授与式を行ない8名の卒業生を出した。同年7月21日の『読売新聞』に次の記事がある。

女子教育奨励会の設立に係る東京女学館(虎の門内)に於て去る十七日第一回卒業証書授与式を執行せしが、当日の来賓には九条公爵、土方宮内大臣、辻文部次官、岩倉公爵夫人、後藤伯爵夫人を始め内外の貴女紳士無慮三百余名にして外山文学博士、増島法学博士の演舌あり。

8名の卒業生に対し、300余名の来賓とはいかにも大げさである。卒業証書には卒業合格を認定された学科と教授者の署名があるが邦人教師も外国人教師も東京府に提出された「私立女学校設置願」の教員と違う。あれほど鳴物入りで宣伝した英国大学校卒業の女性学者たちはわずか数年の間に入れ替わってしまったのである。そもそも学校の生命は教師であるのに東京女学館は最初から発起人たる政界・財界・学界教育界の有力者の教育意見・主張からはじまり、学校設置の財源や校地校舎のことばかりであった。英国流の貴婦人養成を目標としたので英国から女性学者を招聘した。しかるに彼女らが来日した数年間に日本人の対西洋観が急速に変わり、教育観が激変したのである。東京女学館最初の卒業式の新聞記事が華麗な来賓の多さに埋め尽くされ、外国人教員の姿が見えない理由はここにあった。『東京女学館百年小史』にこの時期の変貌は記されていない。しかるに『東京女学館史料』第5集に名取多嘉雄氏（立教女学院短大教授）の「和魂対洋魂 —明治期宣教師たちの苦悩—」があってこの間の事情を説明している。適切な叙述と思われるので、これを略述しよう。

そもそも教養ある西洋婦人を日本に呼んで新しい市民社会の貴婦人を養成しようと企画したのは外山正一であった。彼はその若き日の留学経験から西洋の高い文明を身につけた教養ある女性は英国聖公会の宣教師であると直観していた。そこで英国の女性宣教師を教師に招聘したのである。時は廃藩置県後の士族反乱を粉碎し、民権運動を抑え滔々たる欧化主義に傾いていた。目前には憲法制定が迫り条約改正の重大性が指導者にのしかかっていた。ために鹿鳴館での貴婦人の社交が重要視されたのである。しかし、騒々しい催しは識者の好感を得られなかった。高級な西洋文化に触れる貴婦人の社交というふれこみに反し世俗的で下品であった。ここに過去の日本のよい文化を見直そうという日本主義が学界、思想界から起った。この日本主義は昭

和初年の神がかり的な右翼的国家主義と全く違う。明治初期に洋学や英語を学んだ思想家が新聞や出版に拠って西洋かぶれの行き過ぎをいましめたものである。東京女学館をつくる女子教育奨励会ができたのはまさにこういう時であった。発案企画者の外山正一は西洋文明の体得者は英国貴婦人に如くはないとして、当時、英国聖公会の宣教師として来日していたE.ピカステスに女教師の派遣を依頼した。その頃、英国聖公会は世界各国への宣教熱で盛り上がっていた。それはこれまで英国がとってきた植民地経営へ贖罪しよくざいの気持ちもあったという。ピカステスは喜んでキリスト教の布教を条件に英国人女教師の派遣を承諾した。かくしてカロライン・カルクス以下7名の英国聖公会女性宣教師が来日、東京女学館の最初の教員になったのである。しかし明治19年10月におこったノルマントン号事件以来、日本の対英世論は悪化しつつあった。この事件は横浜から神戸へ向かう英国汽船ノルマントン号が紀伊沖で嵐に遭って沈没した時、乗組員の英国人水夫は全員ボートで脱出して助かったが、日本人乗客は全員死亡してしまう大惨劇となった事件である。当然朝野をあげて憤激した。時恰も不平等条約改正が失敗したので英国は治外法権によって裁判を横浜と神戸の海事裁判所で行い、結局、船長ドレークは3ヶ月の禁固という軽罪で結審したのである。日本の対英感情はますます悪くなった。

一方、キリスト教に対する感情にも変化がみられた。本シリーズ62号で述べたようにキリスト教の隆盛に対して仏教徒の攻撃が激しくなり、さらに日本独自の道德教育を打ちたてよという世論は教育勅語の発布になった(本シリーズ63・64)そして教育と宗教の論争(本シリーズ65)になる。東京女学館が虎の門に移転して第1回の卒業式を行ったのはこのような時であった。機を見るに敏な外山正一は“ヤソ教宣教師の助けを借りる教育は亡国の技”と言って、これまでの主張を180度転回し、東京女学館の英国人女性宣教師何人かくびを誡にしたのである。

しかしこの時の誡首追放は婦人宣教師に一樣ではなかった。貧民街に日曜学校を開いて布教した教頭格のマクレー以下熱心な宣教師ほど槍玉にあげられ、日本の娘を愛すとして麹町区永田町に豪邸をたて、そこで永眠した校長格のカルクスは女学館に出入し、また布教活動をしない条件で雇入れている。

明治25年、外山正一は東京女学館の教授監督（校長格）になって自ら学校の運営に携わったが、彼は帝国大学教授であり、貴族院議員である。ここにおいて東京女学館は館長を置くことになり、明治26年12月、元文部次官の辻新次に館長を迎えた。辻は信州松本藩士の出身、幕府の開成所で学び新政府の文部省に務めた。改正教育令の学事改革では普通学務局長として敏腕を振り、最初の内閣では森文相の文部次官になった。



辻 新次

いわば半生を文部行政に捧げた人物で、当時の日本の教育行政、就中^{なかんづく}、普通教育について知り尽くした官僚であった。東京女学館館長になる前年、辻は文部次官を辞任し、女学館の改革にとりかかった。それが明治27年の学則改正であった。

新学則は第1条に「本館は女子教育奨励会の旨趣に基づきて本邦女子の淑徳を養成し且つ必要なる學術技芸を教授せんが為に設立したるものなり」とうたう。ここにはすでに「欧米の貴婦人」という目標が消え「本邦女子の淑徳」が模範されている。キリスト教と絶縁したのである。本科とも言うべき高等女学科は6年制で入学資格は修業年限4ヶ年の尋常小学校卒業生となっている。これは翌28年1月に出る「高等女学校規程（文部省令1号）」と同じである。高等女学科の名称と言

い、修業年限といい、入学資格といい、女学館の新教則は「高等女学校規程」を先取りしている。元文部次官の面目躍如というところである。高等女学科は英語専修の第1部と手芸専修の第2部に分け、第1部は手芸、理科等を縮小し、第2部は英語を履修しなくても良いとしている。さしずめ第一部はさらなる進学用、第2部は家庭の主婦になるためのコースであろう。いまだ日本女子大学校ができていなかったので、第1部生の進学先として国文漢文英文を修める高等専門科を置き、また高等女学科の一科目あるいは数科を修める特別科（選科）も置いた。このような多岐にわたる女学校の教則作成は当時の女子教育の実態を知り尽くした辻元文部次官であったからこそのことと思う。

明治31年5月、辻新次は多忙を理由に館長を辞し吉村寅次郎が第2代の館長になった。吉村は慶応義塾の出身で官立広島英語学校校長、第二高等学校校長を歴任し文部省と繋がり^{つな}があったからであろう。吉村館長は専門科を国文学部、英文学部、技芸学部の3学部^{つな}に編成し直すなど若干の改革を行ったが、翌32年の紛争に巻き込まれ館長を辞任した。後任の館長には土方久元女子教育奨励会が就任した。明治32年8月31日の国民新聞に東京女学館生徒の風紀紊乱記事があるが、このことと吉村館長辞任の因果関係はわからない。

参考文献『東京女学館百年小史』

『東京女学館史料』第1集、第4集、第5集、第6集、第8集、第9集

東京帝大生らの学費及び教科書・学用品代について

— 『東大入学案内』(1935年12月)から —

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

水平書館(千代田区神田神保町)から送られて来たBook List Paper(2020.10)を拝見して、私が注文希望した文献資料が幸いにも抽選ないし無抽選により落手できた1冊が、東京学生消費組合赤門支部図書部『東大入学案内』(1935年12月、全104頁、古本価格2千円)であり、そのうちより東京帝大生らの「学生生活」の「学費」について、本稿では紹介してみたいと思う。なお参考情報ながら、現在の書誌データ・サイトCiNiiによれば、『東大入学案内』の1937年2月版が唯一、神戸大学附属図書館に1冊所蔵と挙がっている。

この『東大入学案内』では、「授業料」等については「年額一二〇円で五月及十一月に六〇円宛納付することになっているが、学生の生計困難は納入期日励行を期し難くしている尚入学の際は入学金五円を納付せねばならぬ」(59頁)と記されている。さらに、「加入は必ずしも強制的ではない」という「学友会費」については、「緑会(法)五円(三ヶ年分。以下同じ)、経友会(経)六円、文学部学友会(文)六円、鉄門クラブ(医)二〇円、薬友会(薬学科)一五円、丁友会(工)一四円(運動会費を含む)、理学部会(理)六円、紫友会(農)五円」(59~60頁)と挙がっている。「入会は自由」という「運動会費」についても、「一ヶ年二円。六大学リーグ戦、其他帝大の出場する野球戦には会員証呈示で無料で入場出来る。又野球用具等を貸与しているが、此は学消、各学部学友会でも備へている」(60頁)としている。困窮する、いわゆる「貧困学生」については、「授業料免除及び貸費給費の制度がある。授業料免除は昭和六年の東北地方飢饉に際し学生大衆の力強い要

求によつて翌七年四月から生れたものである」(同頁)と、補足されている。

次に「教科書・学用品」であるが、まず「教科書、参考書、文具等の各学部共通の一月平均支出額」については、「八円見当て昭和四年度の調査の十四円に比し著しい減少を示している。其の中最高を占むるものが医学部で、此に続いて理、文、経、法、工、農の順序となる。尤も文学部はその中に多数の学科を含むので、原書を多く必要とする外国文学科と然らざる学科との間に大きな差異がある」(60頁)とする。「文具代」については、「各学部を通じて一ケ年平均約二円見当てであらう。実験用具を要する学部では文科系統より若干高くなるのは当然である」(同頁)としている。

「各学部別」については、次のとおり、「**法学部** 入学後一ケ年間の教科書、必要参考書は約二五円から三〇円程度。**経済学部** 大体法学部に近いが、法律書が少い為二〇円乃至二五円。雑誌、単行本の数は法学部[よ]り多い。**文学部** 既述の如く各学科により相当の開きがあり、専ら和書を用ひる学科は最低五、六円で足り、外国文学科の如きは教科書丈で十円以上に及ぶ。概して法経文の三学部では教科書以外に一般の単行本、雑誌が必要であり、其額は当然教科書以上に上るのが普通である。**医学部** 直に購入を必要とするもの解剖学(原書)六〇円(日本版四〇円位)、組織学(原書)二〇円(日本版五円)、化学実験書四円、解剖器七円、白衣学消特製一円四〇銭(市価一円六〇銭)位である。原書は日本版の複製で充分間に合つて行く、従つて之によれば、三四十円の節約が出来るわけである参考書は各教室備付のものを利用するのが普通である。実験用具としては別に必要なく、聴珍[ママ]器も一学年は必要ない。**薬学科**は教科書及び必携参考書が約二〇円、他の書籍は医学科同様教室備付のものを利用すればよい。器具類の最低標準は左の通りである。化学実験用一約一五

円、検鏡実験用一約一円前後、白衣（既述）、解剖器は高等学校時代ので間に合はずとしての計算である。**工学部** 教科書は各学科により異り、五円位から三〇円位までである。参考書は教室備付あり。器具類は高等学校で用ひたので足るが、只計算尺は新しく必要である。此にも種々あり電気学機械用のは最も高く一五・六円程度、土木等では七円位ので間に合ふ。**理学部** 教科書は各学科で異なる事勿論であるが、一般に用ひられず殆んど費用もかからぬが、参考書は殆んど凡てが原書がある為今日では相当の額に上る。大体一年に五、六〇円見当であらう。教室備付の図書は大に利用すべきである。白衣、解剖器に就ては既に述べた通りである。尚動植鉱物、地質学科等では演習の為の旅費が入用であるが、大した額には上らない。**農学部** 各学科の性質で相当の開きがある、例へば農業経済学科では経済学科と大差なく。農芸化学では参考書二〇円位他の書籍は教室のものを用ひ、白衣（既述）を必要とする。獣医学科では医学部と同程度農業土木では工学部と同程度である。特殊なのは林学科の演習旅行の旅費、獣医の動物購入等である。前者は年一〇〇円に及ぶ事がある」（61～63頁）とされる。

ここまで、東京帝大生らの学生生活上の学費等について紹介してきたが、同上書の最後では「諸君は将来その各々の才能又は其他の理由に基く実に種々様々なる自己の抱負を以て社会に臨まれる事であらう。…かくて、生活の為の『学士号』又は『優良なる成績』も自ら一定の限度内に於て存在の理由をもつ、が、それは飽くまでも一定の限度内である事を諸君は決して忘れるべきではない。若し諸君にしてその限度を忘れるならば、諸君は立所に、かの歴史上初期商品生産社会に於て我々の見た恰も盲目的金埋蔵者の如き『優』蓄蔵者と化し去るであらう。そして、然る時は、も早や諸君は『真理探究者』ではなく、一個の純然たる資本主義の奴隷に外ならぬ」（103～104頁）と、かなり

手厳しい苦言も示されている。いつの世も、学生という存在に対して、願いを込めて教育上臨む基本姿勢というものは、そう大きな違いがないのかもしれない。あたたかくも、時に厳しいもの、北風と太陽のようなものであろうか。

明治後期に興った女子の専門学校(28)

女子英学塾の創設者—津田梅子

ながもと ゆうこ
長本 裕子(ニューズレター同人)

女子英学塾は、明治33年9月、東京市麹町区一番町にて「私立学校令」により開設された。創設者は津田梅子、36歳であった。現津田塾大学の前身であり、女子の英語高等教育の嚆矢である。

まず、稀有な運命をたどった津田梅子について述べよう。梅子は、元治元年12月3日(1864年12月31日)、江戸牛込南町で、外国奉行の通弁父津田仙、母初子の次女として生まれた。父仙は、慶應3(1867)年正月、勘定吟味役の随員として渡米し、同年6月帰国。明治2年、洋風旅館築地ホテル館に勤め、西洋野菜の栽培を始めた。これが学農社農場の始まりとなり、後に農学校を設立する。4年1月、北海道開拓使の囑託となった。

明治4年3月、政府は北海道開拓使次官黒田清隆の建議により、将来の女子教育の指導者を養成する目的で、米国への女子留学生を募集した。期間は10年間、必要経費はすべて官費で支払われ、少女らには年800ドルもの小遣いを支給するという好条件であった。しかし、一人の応募もなく、二度目の募集でようやく以下の5名が応募し、決定した。

吉益亮子(15歳、東京府士族秋田県典事吉益正雄娘)

上田貞子(15歳、新潟県士族外務中録上田峻娘)

山川捨松(12歳、青森県士族山川与七郎妹)

永井繁子(9歳、静岡県士族永井久太郎妹)

津田梅子(8歳、東京府士族津田仙弥娘)

(年齢は数え年、『津田梅子を支えた人びと』より)

いずれも戊辰戦争で敗北した旧幕臣の娘や妹であり、父や兄が洋行の経験を持っていた。梅子は5歳になる前から漢文の講読や手習い、舞踊の稽古に通った。仙は、次女でもあり、梅子の利発さを見て応募させたのだろう。



5人の女子留学生 左から上田貞子、永井繁子、山川捨松、津田梅子、吉益亮子 『津田塾六十年史』より

出発に先立ち、4年12月20日、5人は美子皇后^{はるこ}に拝謁した。

御簾越しに女官を通して『…成業帰朝の上は婦女の模範とも相成様心掛け日夜勤學可致事』という御言葉を賜った。梅子はこの「帰朝したら婦女の模範となるよう」という御言葉を終生忘れなかった。

12月23日、5名の少女たちは、全権大使岩倉具視はじめ総員102名の欧米視察団とともに、横浜からアメリカ号で出発した。稚児髷^{ちごまげ}に華やかな振袖姿の少女たちは注目を浴びた。見送りの人々の中から“随分物好きな親たちもあったものですね。あんな娘さんを亜米利加三界へやるなんて父親はともかく、母親の心はまるで鬼でしょう”という声が聞こえた。新しい時代に向け、学びのチャンスとして父や兄が強く勧めたのであろう。それにしても殊に梅子など、満7歳になる直前である。敗北したとはいえ、士族の娘が遠く太平洋の彼方米国へ留学するなど、当時の人々には理解しがたいことであった。

梅子たちは激しい船酔いと、慣れない外国料理で辛い23日の船旅を経験した。大陸に入ってからは大雪で汽車が不通となり、ようやくワシントンに到着したのは2月29日。横浜を出発してから70日が経っていた。

梅子は以後ワシントンで11年間過ごす。駐米弁務公使森有礼が少女たちの監督をした。森は、コネティカット街に家を一軒借りて、英語の

教師とコックを雇い、毎日2時間の英語の勉強と週に1回ピアノのレッスンを受けさせた。半年ほど経ったころ、年上の吉益亮子と上田貞子がホームシックにかかり、10月末帰国させた。二人の帰国を機に山川捨松はニュー・ヘイヴンのレオナルド・ベーコン家に、永井繁子はフェア・ヘイヴンのジョン・アボット家に預けられた。幼い梅子を引き受ける家庭が見つからず、日本弁務使館書記官ランメン夫妻が1年間の約束で引き受けた。夫妻は子育ての経験がなく、夫人は40歳を過ぎていたからだが、結局11年間預かった。利発な梅子に愛情が生じたのであろう。

チャールズ・ランメンは、1819年生まれ。『モンロー公報』の編集や多くの新聞に関係し、『米国在留の日本人』など30余の著書がある文化人で親日家だった。釣りや絵画などを趣味とした。アデリン夫人は、1826年生まれ。尼僧寺院付属女学校で教育を受けた。親切で愛嬌のある人であった。

梅子は、1学級7~10数名で、全校生徒100名ほどの私立小学校に入学した。クラスメイトから好かれ、学習の進みが早かった。英語を学んで9ヶ月で、渡米の記憶を書き綴っている。梅子は9歳、明治6(1873)年の春、自ら受洗を希望した。ランメン夫妻は敬虔なクリスチャンであったが、特に勧めたわけではなかった。森と相談の上、夏休みにフィラデルフィアの郊外オールド・スウィーズ教会で、米国聖公会の儀式により受けさせた。ペリンチーフ司祭は、梅子の受け答えがしっかりしていたので、成人用の洗礼を施した。

同年6月、森が帰国し、後任として吉田清成が着任した。吉田夫人から日本語の勉強を勧められるが、梅子は英語を勉強しに米国に来たのだから、日本語の勉強で苦勞するのはつまらないとあまり勉強しなかった。ほどなく日本から持参した書物を捨て、日本語をすっかり忘れてしまい、帰国後苦勞することになる。

明治11(1878)年秋、アーチャー女学校に入学。生徒はやはり100名くらいで、中流家庭以上の女子が通う学校であった。普通学科の他、心理、星学、英文学、フランス語、ラテン語などを学んだ。梅子は数学が得意だった。語学も米国の少女以上と担当教師が褒めた。音楽、絵画も励んだ。読書欲が増し、ウォーズワース、バイロン、テニス、ロングフェロー、シェークスピアなどを読んだ。

夏になるとランメン夫妻は梅子をつれて旅行した。アレゲネー連峰、白山連峰、ナイヤガラ、メーンの海岸等。梅子は快活でいたるところで友達ができた。友人らは梅子の広い知識に驚嘆した。健康で、クローケ、テニスなどではリーダーであった。演劇・チェスも好んだ。ランメンは自由を重んじ、梅子の好みに任せた。絵画はランメン自身が手ほどきした。このように少女時代、小規模の学校で行き届いた教育を受けたこと、おおらかなランメン夫妻のもとでゆっくりと学んだこと、休みごとに旅行したことなどにより、梅子の豊かな情操が育まれた。梅子は、帰朝後4回渡米しているが、その折には必ずランメン家に滞在し、娘のように甘えたり、夫妻をいたわったりしている。受けた恩愛を終生忘れることはなかった。

明治14(1881)年春、開拓使から3人に帰国の用意を命じてきた。繁子は、学んでいたヴァッサーカレッジの音楽科が3年修業だったので、卒業してその年の秋に帰国した。梅子はアーチャー女学校、捨松はヴァッサーカレッジの本科を卒業するため1年の延期を願い出た。二人は、翌年10月サンフランシスコ港を出発した。米国を発つ2ヶ月前、捨松はホストファミリーの末娘アリス・ベーコン(後述)に手紙を書いた。“来年の春には日本に来てください。二人で学校を作りましょう。”と。梅子より4歳年上で学位を取得した捨松は、学校設立の夢を強く抱いていた。そして“梅子も手伝ってね。”などと未来図を描きながら帰国の途についた二人であったことだろう。

参考文献

『津田梅子』吉川利一

『津田英学塾四十年史』『津田塾六十年史』

『津田梅子を支えた人びと』飯野正子・亀田帛子・高橋裕子編

『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松』久野明子

学校資料の教材化を模索して⑰

－運動会と組体操を事例とした授業モデルの開発－

はった ともかず

八田 友和(クラーク記念国際高等学校)

1. はじめに

2016(平成28)年に、スポーツ庁の政策課学校体育室から「組体操等による事故の防止について」という事務連絡が発せられた。この連絡では、体育の授業や体育的行事(運動会等)、運動部活動等における事故防止に努めるように要請している。この通知もあり、組体操の実施は全国的に減少傾向にあるものの、実施についての賛否は分かれている。一方、近年においては、運動会の実施そのものにも賛否が唱えられるようになった。その背景には、熱中症の増加や教員の負担増、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う影響など、多くの問題が介在している。

以上を踏まえ本稿では、運動会実施に関する賛否や組体操の賛否について考える授業モデルを作成したので、その概要を整理・提示する。

2. 運動会の歴史

ここでは『学校史でまなぶ日本近現代史』の「運動会の歴史」を取り上げ、運動会の歴史と変遷について整理する。¹⁾

日本最初の運動会は、1874年の海軍兵学寮での競闘遊戯会とされている。また、学校においてはじめて運動会が行われたのは、1878年の札幌農学校だといわれている。なお、運動会が小学校に普及したのは、1880年代後半からとされている。1907年に義務教育年限が引き上げられ、学校には「体操場」の設置が義務付けられるようになる。また、大正時代頃は、まだ学校独自の運動会が少なく、他校との連合

運動会が主流であった。種目としては、体操的な種目・唱歌遊戯・リズムダンス・徒競走・綱引き・軍事教練的種目など多様になっていく。1930年代に入ると、軍国主義が強まり、運動会の様子も変化する。具体的には、個人競技が減り「菊の花、愛国行進曲、ヘイタイサン」などといった種目が増える。さらに、1941年に国民学校が誕生するころには、「戦技競争、飛行機ごっこ、軍艦行進曲」などの種目が多くなる。この背景には、「皇国民錬成」というスローガンが中心に掲げられたことが挙げられ、協同心・忍耐心・勇敢敏活の気性などの養成が求められた。戦後は、戦時色の強い種目を実施してよいのか賛否が分かれるなど、民主教育への移行に伴い、運動会の在り方も再検討・再編成されることになった。

以上のような運動会の歴史と変遷を踏まえた、授業モデルの開発を行ったため、指導案の形式で紹介する。

3. 授業モデル²⁾

時間	学習内容	生徒の活動 (○発問・指示、・予想される回答)	教師の指導・留意点
導入	1.めあての確認	○ 運動会・組体操の実施の是非を事例に小論文を執筆することを伝える。	題材を提示することで、学習者に本時の見通しを持たせる。

<p>展開</p>	<p>2.資料の並び替え</p> <p>3.調べ学習</p>	<p>○運動会や実施される種目の歴史・変遷について紹介する。 （『学校史で学ぶ日本近現代史』やインターネット上の記事などを引用し、生徒たちに提示する。）</p> <p>○最近のニュースを中心に、運動会・組体操の実施に関する賛否について調べ学習を行う。</p> <p>○「運動会・組体操のどちらかを選択し、その実施についてどのように考えるのか」というテーマを学習者に提示し、小論文の執筆を行う。</p>	<p>運動会や種目の歴史などを紹介することで、自身の体験以外の視点を与えることに留意したい。</p> <p>あらかじめ、関連するニュースや記事を確認し、机間巡視の際に、サポートする。</p> <p>原稿用紙の使い方についても、触れる。</p>
<p>まとめ</p>	<p>4.本時のまとめ</p>	<p>○次回の告知 運動会で小論文を書いたグループと、組体操で小論文を書いたグループの2つに分かれて、グループ内で発表を行い、その後全体共有を行うことを伝える。</p>	<p>次回の告知を行うことで、次時までには何をしなければならぬのか、考えさせる。</p>

4. 考察

本研究の成果として、運動会・組体操という身近に感じやすい学校行事を取り上げた小論文指導モデルを提案できた点である。本稿では、大まかな授業の流れを提示しており、詳細までは述べていない。詳細を明記しないことで、目の前にいる生徒の実態や経験に基づき、臨機応変に教授方法や教授内容を精選できると考えている。

一方で「実践を行いその有効性を検証すること」「時間配分」などについて課題が残った。今後の課題としたい。

5. おわりに

本稿では、運動会・組体操を事例とした小論文指導について、授業モデルを提示しながら、その概要を紹介してきた。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、運動会の在り方も見直されている。過去に生徒自身が参加した運動会での体験や、近年の運動会に関するニュースなどを踏まえて、今後の行事の在り方を考えることは、生徒自身が、これからの教育の在り方や学校生活の在り方を考える上でも重要な方策になると考えている。今後も、類似の問題や社会問題を取り上げた授業モデルの開発や、小論文の指導を行っていきたいと考えている。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、クラーク記念国際高等学校の石川真椰氏にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

【註】

- 1) 『学校史でまなぶ日本近現代史』のpp.137-141を参照。
- 2) 本モデルでは、対象となる生徒が小学校・中学校在籍時に運動会に参加していることを想定している。よって、運動会が実施されることを

“当然のこと”と感じていると思われるため、その考えに揺さぶりをかけるような学習過程を踏まえた。

【参考文献】

・呉地初美2017「学校行事における運動会の教育的役割－昭和期の横浜市立神橋小学校の事例を中心に－」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』24号-2、pp.121-132

・村野正景・和崎光太郎(編)2019『みんなで活かせる!学校資料－学校資料活用ハンドブック－』学校資料研究会

・島田雄介・神野晋作・八田友和2018「学校所在資料の活用～学校現場に聴く～」『考古学研究』第64巻3号、pp.10-19

・文部科学省2019『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説－地理歴史編－』東洋館出版社

・歴史教育者協議会2007『学校史でまなぶ日本近現代史』地歴社

・文部科学省ホームページ「組体操等による事故の防止について」(最終確認2021年1月3日)

https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2016/10/05/1377941_010.pdf#search='%E7%B5%84%E4%BD%93%E6%93%8D+%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81'

カレッジノベルの研究への道(19)

:久米正雄「受験生の手記」(10)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

前号に引き続き、今号でも「受験生の手記」を恋愛譚という側面から検討する。

高等学校に落ちた健吉は、不合格を知った二三日後に姉の家へ行く。健次に会うべく彼の部屋で待っていた際に、彼の引き出しにあった澄子からの手紙を発見してしまう。もっとも、机の上の祝電の電報を見て、きっと澄子から手紙をもらっているはずだと考え、自ら引き出しの中を見てしまったのだが。その手紙は以下の通りである。

健次さま。私は何よりも嬉しくて堪りません。もう嬉しくて嬉しくて涙が出ました。お兄さまはお気の毒ですけれど、運だから仕方ありません。でも貴方が無事に合格なすつたので、貴方に心からお祝ひしなければなりません。実は私は貴方がお入りなさるやうに、毎晩お祈りをしてみました。その甲斐があつたかと思ふと、神さまにも御礼を申さずには居られません。

これから貴方はもう、立派な一高生ですわね。さぞお威張りになる事でせうね。けれども、いくらお威張りになつてもよう御座いますが、余り偉くおなりになつて、私なぞを御相手になさらぬやうになつては厭よ。どうかいつ迄も、いつ迄も交際して下さいな。折角お宅へ遊びに行つても、貴方に悪い顔をされると、私何より悲しいのよ。私このごろ貴方の事ばかり考へてみてよ。余り無駄な事を云つて、お気に障つたら御免なさい。怒つちや厭ですよ。

御約束によつてお祝ひの印まで、別封の万年筆さしあげます。二三度私が使ひましたけれど、まだ新しいんですから、どうぞ使つ

て頂戴。

貴方の、澄子より

愛する健次様御許に。

これをもって、健吉の恋愛はあっけなく散ることになった。一人暮らしを始める際に健次と澄子との距離が近くなることを懸念していたわけだが、見事にそれが現実になったのである。

健次と澄子がいつから懇ろになったのかは書かれていない。しかしながら、これまでに見られたいくつかの伏線を考えると、高等学校に合格したから二人の仲が深まったというわけではなさそうである。手紙の文面が正しいと仮定すれば、澄子は健次のために「毎晩お祈りをして」いるのである。

もちろん姉が言うように、澄子が「無邪気なだけ」なのだとしたら、健吉の合格も合わせて祈ったのかもしれない。しかし、文面からはどのような状況は読み取れない。明らかに澄子の気持ちは健次の方に向いている。

健吉の目線に立てば、1年前は自分に慰めの手紙を送ってくれた澄子が、自分から健次にあっさり乗り換えたとしか映らないであろう。その意味では澄子は若い男（といっても1歳しか離れていないが）好きのコケティッシュな女ということにもなるのかもしれない。

というより、そもそも澄子が健吉に恋心を抱いていたか否かということすら定かではない。この小説に描かれているのは、あくまで健吉の恋慕である。1年前の慰めの手紙は健吉にとってラブレター以上の意味を持っていたことは事実だが、澄子はまさしく社交辞令として送っていた可能性すらある。その意味では、健吉から健次に乗り換えたということ自体が、あくまで想像の話に過ぎないという可能性すらある。むしろその可能性の方が高いといった方がよいだろう。

打ちひしがれた健吉は、憂さ晴らしに向かう。

翌朝、私は上野公園の高台のベンチへ、ぼんやり腰を下ろして
ゐる自身を見出した。

昨夜からかうなる迄の事を考えると、私はそれが夢であれば
いと願った。あれから佐藤の処に居居つてゐる中に、そこへ青木
といふ佐藤の友人が尋ねて来た。それで三人は近所の牛肉屋へ
上つた。私は初めて飲めもしない日本酒を飲んだ。そしてしたゝか
酔つ払つた。彼らが私を俥に乗せた時、私は何処に行くか知らな
かつた。いや、全く知らなかつた訳ではない。寧ろ卑怯な自己欺
瞞で、知らぬ事に自ら思ひ定めてゐたのだ。俥は酔つて吐気さへ
ついた私をのせて、ひたぶるに暗を走つた。そして灯の多い、大厦
の立ち竝んだ場所へ着いた。私はと或る家の中に有耶無耶で担
ぎ込まれた。それから宥めるやうに或る室に連れ込まれた。そして
そこで初めての、不面目な一夜を過ごした。それからこれへ思ひ
出して来る事は、今さら夢のやうだつた。けれど今朝もこゝまで来
たのは、今朝早く目が覚めて、その見知らぬ一廓の或る家から、逃
れるやうに一人出て来たのは、白日の下の事実だつた。

「あゝ飛んでもない事をした。自分はこゝまで墮落したか。」私は朝
の冷たいベンチの上で、泣きさうになりながら考へた。

昨夜始めて知つた禁断の木の実。その事も堪らなく厭に思ひ返
された。それは全く私にとつて無味だつた。あんなものに、何の身
を打込むだけの価値があるのか、と心から疑はれた。

「要するに自分には凡ゆる物が失はれたのだ。」

私はさう心で呟いて、今、曉霧の一片づつ剥げて行く浅草一帯
の風景を眺めた。霧の晴れた跡には只、黒いごみごみした屋
根タタが、押しかたまつたり、もり上がつたり、寄り合つたりしてゐ

るのみだった。そしてそこには、何の輝かしい朝を迎える色もなかった。

女で味わった痛みは、女で解消するという話なのだが、絶望的なまでに凡庸である。金で片を付けているという点は際立つが、失恋の痛みは新しい恋を始めれば解消するというのと、本質的には変わらない。「上書き保存」をすればよいという話であるが、見事なまでに健吉は「上書き保存」ができていない。これまたよくある話である。

しかし、絶望に打ちひしがれたというだけでは小説として落ちがつかない。この後健吉は福島に向かい、猪苗代湖で入水自殺する。その手記をもとに、久米が小説化したという流れになっていることはすでに見た通りである。

次号では、これまで数回に分けてみてきた点を総合して、恋愛譚としてのこの小説の性格について考察していくことにする。

教育史研究のための大学アーカイブズガイド(27)

—コロナ禍における大学アーカイブズの現状④—

たなか さとこ

田中 智子(早稲田大学大学史資料センター)

今号も引き続き、現在の各大学アーカイブズの業務の状況について述べていく。4回目の今回は、私立大学アーカイブズのうち、(1)青山学院資料センター、(2)慶應義塾福澤研究センター、(3)国士館史資料室、(4)成城学園教育研究所の状況について紹介していく。

(1) 青山学院資料センター

青山学院資料センターは、「青山学院に係る重要史料又はこれに準ずると認められるもの並びにキリスト教に係る貴重な資料を収集、保存及び公開することにより、青山学院建学の精神の高揚及びその歴史への理解を図り、またキリスト教教育史研究等に寄与することを目的と」している機関であり、青山学院関係資料、メソジスト教会関係資料、内外キリスト教史関係資料などの歴史資料や、明治期キリスト教関係資料、わが国の初期英語・英文学関係資料などの特別コレクションを収集・保存・公開している¹。

同センターは平日の 9:30~17:00、土曜日の 9:30~13:00 を開室時間としていたが、2020年3月25日の東京都知事の外出自粛要請を受け、以降の土曜日を臨時休館とした。さらに4月8日に緊急事態宣言が発令されてからは平日も臨時休館となった。宣言が解除された6月1日からはメールや電話によるレファレンスを再開したものの、来館による資料の閲覧・複写、寄贈資料の受入、所蔵資料の展示会等への学外貸出の業務は依然として停止したままである。今後の動きについては同センターホームページのお知らせを参照していただきたい。

<http://www.aoyamagakuin.jp/history/mcenter/index.html>

(2) 慶應義塾福澤研究センター

慶應義塾福澤研究センターは 1983 年、「福沢諭吉やその門下生、福沢の創立した慶應義塾及びその出身者・関係者の事績について幅広く資料収集・調査研究を行い、さらには福沢や義塾を視野に置きつつ、広く近代日本の研究を目的として」塾史資料室を発展解消するかたちで発足した¹。その目的の通り、研究に重点を置いている機関のため、閲覧利用も元々「原則として、学術研究を目的とする大学院生もしくは専門研究者」に限定していたが²、新型コロナウイルス感染症拡大を受け、2020 年 4 月 7 日より完全閉室となった。緊急事態宣言解除により 6 月 1 日より電話やメールによる問い合わせ対応を再開したが、資料閲覧は停止したままであった。その後移転を経て、10 月以降窓口業務も一部再開したものの、二度目の緊急事態宣言を受け、本年 1 月 12 日より再び窓口業務を停止している。

<http://www.fmc.keio.ac.jp/news/>

(3) 国士館史資料室

国士館史資料室は、本ニューズレター第 58 号で紹介した通り、(1)百年史編纂事業の推進、(2)調査・収集、(3)整理・保存、(4)利用・公開(展示、利用、教育支援)の4つの業務を行っている機関である。このうち(4)について、新型コロナウイルス感染症拡大により臨時閉室となったため、資料室での閲覧利用と展示室での展示公開が当面の間中止となっている。また、例年 10 月末から 11 月初めに、国士館大講堂で実施していた創立記念展示の開催も、2020 年度は中止となった。ただし、世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎 1 階展示コーナーにおける展示は、昨年 10 月末から再開している。

<https://www.kokushikan.ac.jp/research/archive/news/all.html>

(4) 成城学園教育研究所

成城学園教育研究所は 1977 年に設置された。「研究集会や講演会の開催、研究年報や季刊誌『成城教育』の編集・発行、学園内外の

教育関係資料の収集・保存等々」多岐にわたる業務を行っており³、「澤柳政太郎私家文書」や学園に寄贈された旧蔵書の一部などのほか、大正時代の創立期から現在にいたる学園史関係史料、そのほか教育雑誌や教科書の復刻版などを所蔵している⁴。それらの資料の多くは図書資料室にて一般に向けて公開しているのであるが、現在、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、図書資料室の利用を当面の間休止している。ただし、休止期間中でも複写可能な資料については、実費にて複写郵送サービスを実施しているため、資料の利用を希望する場合は、一度同研究所まで問い合わせをしていただきたい。

<https://www.seijogakuen.ed.jp/edu-lab/help/>

以上、私立大学アーカイブズのうち、青山学院資料センター、慶應義塾福澤研究センター、国士館史資料室、成城学園教育研究所の現状について見てきた。以上4機関に限って言えば、昨年春の緊急事態宣言以降、休館・閉室を継続しているところが多い。これまで取り上げてきた国立公文書館等に指定されている国立大学アーカイブズと比較しても、慎重な対応をしているところが多いように思う。また、慶應義塾福澤研究センターのように、本年1月8日の二度目の緊急事態宣言を受けて、対応を変化させたところも少なくないだろう。次号以降も引き続き、私立大学アーカイブズの現状について見ていく。

1 慶應義塾福澤研究センター「センター紹介」
(<http://www.fmc.keio.ac.jp/about/>)

2 慶應義塾福澤研究センター「利用案内」
(<http://www.fmc.keio.ac.jp/guide/>)

3 成城学園教育研究所「組織・活動」
(<https://www.seijogakuen.ed.jp/edu-lab/organization/>)

4 成城学園教育研究所「所蔵図書・資料」
(<https://www.seijogakuen.ed.jp/edu-lab/library/>)

(つづく)

木下広次に関する先行研究(2)

—身体の西洋化に着目した白石義郎の研究—

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

はじめに

第70号につづき、木下広次に関する近年の研究として白石義郎の2018年の論文「森有礼の二人の弟子 —木下広次と嘉納治五郎の身体の西洋化—」(『久留米大学文学部紀要情報社会学科編』第13号、2018年3月)を紹介したい。

(上記論文は、久留米大学リポジトリの以下のURLでも公開されている)

https://kurume.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=926&item_no=1&page_id=13&block_id=21

白石義郎氏はスポーツ社会学・教育社会学を主要な研究分野にしている研究者であり、木下広次を身体論の視点から分析している点で、学生・生徒の自治の視点から木下を調べている筆者(富岡)にとって大変興味深い。

この論文の内容構成

この論文は、以下の章・節で構成されている。

第1章 問題の所在

第1節 目的

第2節 先行研究の検討

第2章 森有礼における西洋的身体

第1節 「規律」のもとに動く身体

- 第2節 「責め道具」としての兵式体操
- 第3節 森有礼の身体教育論の矮小化
- 第3章 木下広次における身体の西洋化の実践
 - 第1節 森有礼との接点
 - 第2節 学生騒擾の経験
 - 第3節 京都帝国大学における「運動会」
 - 第4節 ケンブリッジ大学のスポーツ・モデル
 - 第5節 測定され、記録される身体、競争する身体
- 第4章 嘉納治五郎における身体の西洋化
 - 第1節 森有礼との接点
 - 第2節 「柔道の発明」
 - 第3節 「精力善用」「自他共栄」
- 第5章 結論
 - 第1節 要約
 - 第2節 今後の課題

各章の概要など

第1章では、学校体育・スポーツに関する研究として、森有礼が目指した身体の西洋化に関する高等教育における実践を検討するという本論考の目的が示されている。

第2章第1節では森有礼の身体教育論について「埼玉県尋常師範学校における演説」（1885年）などを使って説明し、森が目指したものはミシェル・フーコーが『性の歴史』のなかで述べた17世紀ごろのヨーロッパにあらわれた「規律の精神」と同一であり、単に規律に従って行動するだけではなく、自ら規律を作り出す精神であると述べる。このあたり、森とフーコーの身体思想についてどこがどのように共通しているのか、という根拠が十分には示されていない。しかし、発想としては興味深い。

そして第2章第2節では、「西洋的身体なしに、日本の近代はありえな

い」ということが森有礼の根本思想であり、兵式体操はそのための一つの方法であったことを述べる。つづく第3節では、暗殺による中断などによって森の身体教育思想が形式化と画一性のみ矮小化されてしまったと述べている。このあたりの指摘も、論証に必ずしも成功しているとは思えないが、興味深い指摘である。

第3章では、森有礼と接点があり、身体西洋化についての森の思想を受け継ぎ高等教育機関において実践した人物として木下広次に注目している。

白石は、木下広次と森有礼との接点は、森有礼文相にもとめられて木下広次は帝国大学法科大学教授と兼任で、第一高等中学校教頭になったことにあったことにあると述べ、明確な師弟関係にあった訳ではないことわりながらも（その点では、本論文のタイトルのつけ方には賛成できない）、高等教育機関における森有礼の身体教育思想の実践者として木下を位置づけ、京都帝国大学「運動会」などの木下広次の実践を分析することで「森有礼の身体西洋化を逆照射」（第1章第1節）しようとする。

木下広次が学生騒擾に直面した経験をもち（ちなみに本論文では「明治19年」の学生紛擾のことを紹介しているが、これはおそらく、東京大学の明治十六年事件のことだろうと思われる）、第一高等中学校教頭・校長として本郷移転に不満をもつ学生たちに対して提示したのが、学生集団が自らを律する「籠城主義」であったと白石は述べている。仮説としては同感できる。

第3節では、第70号で紹介した京都帝国大学「運動会」についての白石論文での分析を発展させ、木下が目指したモデルがケンブリッジ大学などにみられるスポーツにあると指摘している。

第4章では、嘉納治五郎を木下広次と同様に森有礼の身体教育論の高等教育機関における実践者であったとして、嘉納の身体教育論について述べている。

第5章第1節では、「森有礼・木下広次・嘉納治五郎の共通点したこ

とは同年齢の青年が寝食を共にする学寮を若年期に体験したことである」と述べ、森がトマス・レイク・ハリスの教団で寮生活をしていたこと、木下が貢進生として大学南校の寄宿舎生活を経験し、フランス留学で「パリ大学の学寮を経験した」（ただし、実際にパリ大学の学寮に入ったかどうかは、断定できないと考えている。富岡）、嘉納が私塾を経験したことを紹介している。興味深い指摘であるが、三者の学寮経験については、もう少し具体的詳細な実証が必要であると思われる。

第2節では今後の課題として、「本稿においては森有礼、嘉納治五郎、木下広次を教育思想の整合性から関連づけた。しかし、彼ら相互間の書簡などの一次資料や文献資料を見つけることはできず、二次資料や文献研究にとどまっていた。今後の資料検索をおこなう必要がある」と述べている。実証的研究が必要であることに大いに同意する。また西洋スポーツについての分析であれば、森文政期以前の札幌農学校での「遊戯会」や、1883年にストレンジの尽力によって東京大学で開催された陸上運動会と木下や嘉納の実践がどのように共通してどのように異なるのか、言及が必要だと思われる。

しかし、先述のように、「規律の精神」から森・木下・嘉納を結びつけて論じる白石論文の視点は興味深い。

体験的文献紹介(21)

— 閑話休題Ⅱ 繁栄から没落へ 城右高等学校—

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

前回、東京都内私立高等学校の特異性を述べたが、今回は戦後60年代から70年代にかけての私立高校の激変を東京西郊のいくつかの学校、とくに城右高等学校に焦点をあてて述べよう。

現在、東京の西郊には10数校の私立高校があるが、それらは関東大震災の後の住宅地開拓の波に乗ってできたものである。それまで武蔵野の田園地帯であったが、文化住宅の掛け声で忽ち瀟洒な住宅地しょうしやに変わり、商店街が生まれた。交通の便がよいので中央官庁の若手官僚や一流会社の若手社員が入居した。そしてその子ども目当ての私立中学校や私立高等女学校、裁縫女学校が続々できた。府立の中学校や高等女学校がなかったからである。

戦争中、この辺りも空襲を受けたが山手線内の東京市街ほどひどくなく、学校の多くは焼け残った。戦後それらはすべて新制高校になったが、戦争中と戦後の混乱の中で創立者を失い、適当な後継者を得られないまま、私立大学の附属高校になったものもある。例えば1929年、杉並区和泉にできた京王商業学校は戦後、京王高校になったが1955年、専修大学附属高等学校になった。1930年中野区東中野にできた中野中学校は49年、明治大学附属中野高校になり、1943年、岩崎通信機社長・岩崎精一によって杉並区久我山に創立された久我山中学校は52年、国学院大学久我山高校になっている。日本大学は附属学校設置の先駆者で1926年、杉並区天沼に2番目の附属第二中学校をつくった。戦後、経営は分離されたが、日本大学第二高等学校として大学と連携を保っている。1951年には杉並区和泉に附属校として日大鶴ヶ岡高校をつくった。

さて私にとって思い出深い城右高等学校の盛衰を書かねばならない。城右高校については本ニューズレター55号、62号、63号の「体験的文献紹介」に漢文の師・河野通禰太先生の風貌を通してふれたが、学校については述べていない。

1979年刊の『城右学園四十八年史』（神辺監修）があるのでこれによって城右の盛衰を略述しよう。

東京帝国大学の支那哲学科を卒業した河野は学習院ほかいろいろな学校で漢文を教えたが、どの学校でも校長と折り合いがつかず、いつそ一人で学校をはじめようと思った。たまたま東京府豊多摩郡杉並町にある水谷実科女学校がつぶれかかっているという情報を得たので、これを買収して城右高等女学校を設置した。わずかな生徒とわずかな教員ではじめた学校であるが、教員には給料を払わねばならない。そこで河野は日大はじめ各種の学校で漢文を教え、その給料を全部はたいて教員の給料にした。それでも城右高女は少しずつ成長し、43年には生徒数460名、9学級編成になった。1945年5月の空襲では音楽室に焼夷弾が落下したが、校長以下宿直教員数名が消し止め、他の校舎への延焼を防いだ。

戦後の城右は着実に成長しはじめた。48年には新制度の城右高等学校・中学校になり生徒の増加に合わせて校地校舎を拡張していった。1950年代の高校生急増期には城右も東京都の助成金を受けて鉄筋コンクリートの校舎増築をおこなった。また東京オリムピックにおける中央線の複々線化のため沿線の城右校地が高価に売却されたので、それによって学校の設備、校具が見違えるほどよくなった。生徒の増加もそれに比例する。1956年・611名だった生徒は4年後の60年には1151名になり、また4年後の64年にも1193名を保っていた。戦後の1学年2学級編成が8学級編成にふくれあがったのである。生徒の急増につれて新しい教員もふえてくる。河野校長の言う「一人一人の生徒と向き合う」というようにはいかなくなる。すでに1955年の暮、河野校長と一部の教員と激突した。数年前から生徒の急増、社会意識の変化に対応して今後のあるべき高等学校教育についての検討委員会ができてその答申があった。答申は教育課程をはじめ教育全般にわたるものであったが、その中に学年末試験によって及第落第を決めるの一項があった。これは法規上問題ない所であるが、「落第」の一語が河野校長を激怒させ、委員会に答申の撤回を求めた。校長の言い分は「一度引

き受けた生徒を落第させるのは教育者の恥だ、という古典的なものである。それならば入学試験で劣等生を落とせばよいではないかということになる。生徒募集でさんざん苦勞した河野校長としては、数ある学校の中で本校を選んだ受験生を落とせるか、ということになる。戦前の高等女学校には落第がなかった。卒業と同時に花嫁になるというのが一般的常識であったから高等女学校卒業はひきても引出物のようなものであった。これに対し戦前の中学校はすべて上級学校への進学を目指していたから年々落第生を出していた。戦後の高等学校は原則男女共学だし、女子生徒の進学希望者が増加したから旧制の男女別仕方は通じない。城右の衝突問題に戻れば、「落第は建て前で落第はさせません」と言えば収まったのだが戦後の教師はドライで阿吽の呼吸は使い分けできない。こうして河野校長は幹部教員と対立したまま死の床を迎えるのである。

1964年4月、城右高等学校は創立者・河野通禰太校長の突然の死に遭遇した。何事も河野独裁でやってきた学校は法人を構成し直さねばならなくなった。法人理事長には故校長の夫人が就任し、財務を預る常務理事には校長の甥のH教諭が就任、校長には数学のI教諭、教頭には社会科のY教諭が就任した。H常務理事、I校長、Y教頭いずれも戦後すぐに城右に就職した教員で、40歳を目前にした壮年である。しかし創立者・河野校長の庇護のもとで育った教員で城右高校以外の社会を全く知らない。I校長は自分こそ創立者の意志を継ぐ最適任者と自負し、挙措動作すべて河野校長をまねた。例えば毎朝の朝礼で「論語」の一節を読み訓辞する。「論語」の端から端まで読み尽くした河野校長が、そこから進^{ほとばし}る人生訓話と同列に聴かれない。果たして生徒会から朝礼反対の声があがり、それを口火に学校紛争がはじまるのである。亡くなるまで学校の財務は河野理事長・校長が一人で握っていた。「尚風放談」の合間に聴いたことだが、父親が急死した生徒は卒業まで授業料を返してやった。誇りを傷つけないために一たん受け取った金額を密かに返してやったのである。また戦後ボーナスをはじめた時、戦災を受けた教員や外地から引き上げて住居に困った教員には特別手当を出した。河野校長独特のやり方で人情を感じる。H常務理事はこの話を

聞いていたのであろう。自から3人の幹部は終戦直後に就職したので安い給料に苦しんだとしてボーナスを数倍にした。これが知られると当然ながら教員間に憤懣が沸き起った。また教育機器売り込み業者との癒着も囁かれ教員の一体感はずれはじめた。このような雰囲気の中で69年10月、生徒総会が朝礼廃止を決議、一部の教員が生徒会を煽って学園紛争がはじまったのである。紛争の詳細は語り尽せない。試験ボイコット、労働組合の設立、外部左翼勢力の応援、理事者、父兄、教員の三者会談、学園封鎖がくり返された。その間、生徒の退学が続き、1000名を越えた生徒は71年215名になり、72年153名になって73年、城右高等学校は終焉を迎えるのである。その間の経緯は省略するが、新宿にある文化女子大学の附属杉並高等学校となって74年再起、現在に続いている。

同じような経緯をへて大妻女子大学中野女子高等学校になった文園高等学校^{ふみぞの}のことを書き加えておこう。1941年、福島県郡山の実業家・佐藤伝吉翁が中野区上高田に文園高等女学校を創立した。戦後の改革で文園高等学校になったが城右の紛争と同じ頃、創立者が老衰のため学校の幹部と教員組合派の争いとなり、生徒が激減して破滅、城右より2年早い1972年、都心の大妻女子大学の附属中野女子高等学校になって後年に続いた。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

ちょうど、旧年中にTV放映されていたアニメ作品の1つである「神様になった日」の第5話「大魔法の日」を視聴しました。番組公式HPの同話に関する紹介内容は、次のとおり、「伊座並杏子[主人公・陽太の幼馴染]は、幼い頃に母親を亡くしていた。母の命日が近づき、父を墓参りへ誘うが、仕事を理由に毎年断られてしまっていた。そんな伊座並家を心配したひな[全知の神を自称するヒロイン]は、陽太[主人公]と伊座並家に向かい、何とかして伊座並の父を外させようと画策する」と、記されています。父親と娘との拗れた関係性を、その原因とも考えられた亡くなった母親の存在を、新たに家族の間で再確認させることによって、なんとか前向きに打開させていこうと、お節介な主人公らがサポートするという展開です。亡くなった母親のメッセージ(大魔法)にも、視聴者として私みたいへん感動してしまいました。それら詳細については、無料で視聴できるネットサイトや再放送による番組をどうぞじっくりご覧いただければ幸いです。泣けます。ちなみに、山梨出身の田中さと子さんにもつい勧めてしまいました。話の舞台が山梨という繋がりでしたので。(谷本)

ノート術に関する本がAmazonの電子書籍でよく見つかる。『1日5分ミニノート仕事術 仕事のゴチャゴチャが解決するシンプルな仕組み』(山崎城二著、現代書林、電子版2014年)もそんな1冊だ。

副題のとおり、仕事の「ゴチャゴチャ」がなかなか片付かない生活をしていて、この本をざっと読んだところ、要は「夜寝る前に、翌日取り組む仕事のリストを携帯できる小さなノートに書き出す。仕事が終わるたびに終了マークを書く、終わらなかった仕事は翌日のページに記入し直す」という拍子抜けするぐらいシンプルな内容だった。

しかし、著者の語り口やエピソード(プロミュージシャンから会社員へ)が面白いこともあって、「これならやれそうだ、やってみようか」と思って1ヶ月ほど続けている(そのためのポケットに入る小型ノートの開発に没頭してしまったが)。ノート術・手帳術で一番重なのは、実際に実践されるかどうかという点にあると思う。その点からするとこの本は、「やってみようか」と思わせる力という点では類書から一歩抜きん出ている。(富岡)



会員消息

毎回ながら実は思うのは、他の研究者による著作や論考に対する書評や紹介というのが、なかなか正直なところ一人の研究者としては、とても苦手です。笑。ひとつには、自分がきちんとその著者の意図や意向を汲んで解釈できているのか、十分に言及できているのか…が、なんとも自信もって断言できない点があります。またひとつには、同上の点とも少なからず関連するのですが、自分の考えや意見を著者のそれと批評するかたちが、果して研究上妥当なものか、または有効なものとなっているのか、など悩ましい疑問もあります。

ただ幸い、書評や紹介で取り上げた文献や論考の著者からプライ・コメントがあって、上手く議論がかみ合っている場合には、書評・紹介者としてはとてもうれしいものです。もちろん、関連する他の研究者（読者）からも書評や紹介に対するあたたかい、時に厳しいご意見ご感想をいただく機会もあり、書評・紹介者としてもよい勉強になることは違いありません。若いNL同人諸氏らにも、ぜひ書評や紹介の機会があるならば、物怖じせず積極的にトライしてほしい!と願っています。私は残念ながら、いまだに苦手なのですけれども。ちょうどNL同人のなかには、富岡さん小宮山さんという書評の達人?もいますから、若いかたがたはぜひ両先輩らの書評を大いに自身の参考にしてみたらよいでしょう。先人先輩らの足跡などに真摯に学ぶという姿勢は、何ら恥しいことではありませんので。(谷本)

昨年を振り返って…

11月16日～22日に関西教育学会第72回大会が開催された。今年度の学会大会は、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、オンライン開催となった。発表者は事前に発表資料(A4 5枚程度)を作成し大会委員会に提出した。その資料は、学会期間中はHPに公開され、誰でも自由に閲覧できるようになっていた。また、掲示板のようなものを活用することで、HP上での質疑応答も行われた。筆者も「考古学模型標本から時代の特色を理解する原始・古代史授業開発—小单元「物質資料から時代の特色を探れ!」を事例に—」というテーマで発表を行った。資料を閲覧していただいた皆さま、ありがとうございました。また、このような状況のなか、学会大会開催に尽力してくださった関係者の皆様に感謝申し上げます。本年もご指導ご鞭撻の程、よろしく願い申し上げます。(八田)

本年からレター執筆をするつもりでしたが、つい忙しさを言い訳にさぼってしまいました。オンライン授業の課題攻撃?に学生たちは、精神的にも参っていますが、教員も参っています。「提出期限に遅れても大丈夫! ゆっくり時間をかけて、丁寧に考えるのが大学での学びだよ」と、言いたいところですが、こちらも成績入力の期限があり…。そういえば、看護学

校の集中講義が始まりました。対面授業ですが、フェイスシールドとマスクの一方的な講義で、学生の発表やグループワークもできず、どうしたものか…。(山本剛)

年明け早々から新しい試みとしてZOOMを活用した所属大学初の海外向けの留学研修プログラムを提供しています。この準備のため、年末年始とコロナ禍の自粛ムードながら宮島と広島市平和記念資料館で動画素材の収録に走り回り、動画編集とプログラム運営の日々を送っています。先月台湾の研修グループを終え、現在は中国の研修グループ、今月後半はインドネシアの研修グループが控えています。来日していない分、寮生活への気遣いや管理、病気・事故などの緊急対応がない点はとても楽ですが、通信環境の悪い研修生のための見逃しオンデマンド配信のため準備や日々撮れ溜まっていく動画の管理に、対面プログラム以上の時間と手間がかかり、睡眠不足ではや疲弊しています。しかし研修生たちは日本での実体験を得られないにも関わらず、その場にいるかのような臨場感を覚えて、企画者の私が想像していた以上に満足してくれているようで嬉しい限りです。3月には別のプログラムが入り、このような生活が3月末まで続きます。

画像は1月30日付『中国新聞』26面呉・東広島地方版の記事です。

https://www.chugoku-np.co.jp/local/news/article.php?comment_id=722598&comment_sub_id=0&category_id=112

(小宮山)

国立公文書館等指定の国立大学アーカイブズと異なり、私立大学アーカイブズはホームページ等を見ても、活動状況が不明なところが多いです。今後は電話やメールなどでの調査も取り入れて、なるべく多くの機関の現状をお伝えできるよう頑張ります。(田中智子)

2020年は新型コロナ流行への対応で終始する一年でしたが、その状況は2021年も続きそうです。そのなかで例えば授業でも、研究活動でも、場当たりのでない創造的な活動を少しでも盛り込んでいきたいと思っています。

2019年11月に信州大学大学史資料センターを訪問したときの記事が勤務先の『『A Way of Life - Seko Koichi - 世耕弘一先生建学史料室広報』28号(2020年12月)に掲載されました。インターネットでも公開されていますので、よろしければご覧下さい。

<https://www.kindai.ac.jp/about-kindai/overview/koichi-seko/a-way-of-life/>

訪問してから一年以上経ってしまいましたが、信州大学大学史資料センターの皆さま、その節は大変お世話になりました。旧制高校記念館、松本深志高校とともに私にとっての松本の大切な場所がまた一つ増え、嬉しいです。(富岡)

報告が遅くなってしまいましたが、昨年春より長野県立大学に転職いたしました。2018年開学という新しい大学ですが、1年次全寮制や少人数教育を取り入れるなど、独自の教育を行っています。「地方」と「学生寮」の組み合わせは、今後新しい化学反応を起こすと確信しています。

長野県は、学生時代より毎年のように旧制高等学校記念館(松本市)に通った思い出の深い地です。自然や文化、歴史、人々の優しさに触れ、「いつかこんな地で教育に携われることができたら」と思いを巡らしていました。

山々に囲まれた長野の地は、毎日のように自然の姿を変えます。山々の姿も一日として同じ日はなく、時おり吹く風が街にも森の香りを運できます。自然豊かな環境は、教育の舞台として格好の地だと思っています。そんな長野の地に大正8(1919)年、「第九高等学校」として開設されたのが旧制松本高等学校です。土井晩翠作詞・山田耕筰作曲の校歌には、草創期当時の意気込みが高らかに書き込まれているように思います。

千山万(ばん)岳(がく)高きを競ひ／峙(そばだ)つ信州日本の屋上(やのね)／一
寰(いっかん)あまねく靈気を湛へ／民俗勝りて直(す)ぐなるところ／我が校教(お
し)への聖火を点ず

(松本高等学校同窓会『松高寮歌選集』より「松本高等学校校歌」大正11年。
ふりがなは筆者)

旧制高等学校の特徴といえは寮生活。旧制松本高等学校の思誠寮も、多くの若者たちの学びの空間となりました。寮生による寮での取り組みはもちろん、教職員と寮の関係性などにも、これからの学生寮のあり様を考える上で重要な視点を得ることができます。

松本高等学校校歌は、以下のように結ばれます。

縣(あがた)の森かげ睦(むつみ)の月日／向上一路に並み居る今を／後には忍
ばん楽土の榮(はえ)と／嗚呼わが紅顔数百(すひやく)の健児／つとめよ青春再び
曙(あ)けず

旧制松本高等学校が開校して約100年後にできた新しい学びの場。過去の実践を訪ねることの重要性を、身に染みて感じる毎日です。歴史を学ぶとともに、現在の実践への架橋についても考えていきたいです。ここ長野の地で、少しずつですが、新しい大学像、学びの空間を模索したいと思っています。(金澤)